
煌めきの想い

羽村奈留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

煌めきの想い

【Nコード】

N8662H

【作者名】

羽村奈留

【あらすじ】

有名交流サイト、オーシャン。オーシャンを利用している女子高生は、アップルというネームしか知らない相手とメールをしていくうちに、アップルに興味を持ち、会った事のない相手に恋愛感情を抱いてしまう。

第1話

東京都渋谷区。

渋谷駅の周辺は、狭い区画の中にペンシルビルといわれる雑居ビルが立ち並び、昼夜を問わず狭いビルとビルの谷間を人々が往来している。

今、十月になろうとしている。

まだ蒸し暑さが残っているが、渋谷駅の西にあるマークシティの長い通路の中は、エアコンの風が緩やかに流れ込んでいて幾分涼しい。

さいとうかがり
斉藤華雅里。高校一年生。髪は染めていない天然の日本人色。毎日念入りに整えている柳眉が見えるように前髪があり、月に一回通っている美容室でセットしている肘辺りまでの長いストレートが綺麗な女の子だった。

彼女は、マークシティ一階の長い通路の途中の壁にもたれていた。セ일러服を着た彼女は、中身が入っていない黒い学生カバンを座布団代わりに床に置いて、その上に尻を落として座り込んでいた。

時刻は、十七時を過ぎたくらい。

華雅里の手には携帯電話があり、華雅里は一心不乱に両手でボタンを押している。どうやら携帯電話でメール通信を行っているようだ。

携帯電話の機能は、需要が伸びた事もあって著しく発達した。

個人情報保護法はいろいろと改正され、昔一部の人々が使っていたハンドルネームは、華雅里が暮らす時代では、サブネームとして年齢を問わず誰もが取得し、ネット環境内ならどこでも使用している事になっていた。

華雅里がメールをしている相手は、どこの誰なのかは分からない。華雅里は、今流行の交流サイト、オーションを利用している一人。現在のメールアドレスは、プライベートのものとオープンで使用

するものと分かれている。

プライベートメールアドレスは、気付いているかもしれないが、個人を特定できるもので、仕事など重要な場面で使用する事が多い。オープンメールアドレスは、個人を特定する事はできないので、多人数参加型のサイトで使用する場合が多かった。

華雅里は、オーシャンにブログを掲載していた。当然オープンメールアドレスもブログ内に設置されており、時々ではあるが、ブログを読んだ人々からのコメントがメールとして携帯電話に届くようになっていた。

第2話

今、華雅里は、携帯電話からオーシャンにアクセスをして、コメントの返事をしていた。

コメントを残す相手も当然サブネーム。サブネームだけでは、華雅里にとっても、相手にとっても、実名どころか性別・年齢も分からない。文章の内容から相手の人物像を想像するしかなかった。

華雅里がオーシャンに登録したのは小学生の時。学校の友人に誘われての事だった。

最初は、学校の友人のみでオーシャンを利用していたが、華雅里の成長に伴い、現在は世界各国の人々と意見交換ができるほどになっていた。

そして、高校二年の九月に入ってからである。

華雅里のところに、奇妙なコメントが入るようになった。

誰なのか分からないあなたへ

あなたの言葉は、心地よい感じがします。

わたくしの想像ですが、きっとあなたは、とてもよい環境で生活をされていらっしゃるでしょう。

あなたは、どんな環境で暮らしているのですか？

差し支えなければ、教えて下さい。

コメントは英語だった。とても丁寧な言葉遣いを見て、華雅里は、相手は英国人ではないかと予想した。

華雅里が暮らす時代では、英語は公語として使用されているため、誰でも子供の頃から普通に英語を使用する事ができた。

華雅里も英語で返事をした。

初めまして。

ミサキです。

コメント有難うございます。

今後はサブネームのアップルさんと呼びたいですか？

私が暮らしている環境を知りたいとの事ですけど、私は日本人です。

これでどんな環境なのか想像がつくと思います。

アップルさんは、どこの国の方ですか？

もしよかったら教えて下さい。

ミサキとは、華雅里のサブネームである。

華雅里が返事をする、返事はすぐに返ってきた。

あなたはミサキさんという名前なのですか。

初めて聞いた発音なので驚きました。

世界は広いですね。

教えて下さった日本ですが、わたくしは田舎育ちなので、日本を
知りません。

日本という発音を初めて聞いて感動しているほどです。

日本を図書館で調べようと思いましたが、私が暮らす田舎の図書館に日本に関する文献はありません。

差し支えない程度でいいので、日本について教えて頂けないでしょうか。

第3話

華雅里は、この返事を見て驚いた。ネットシステムが発達し、世界各国の人々と会話が可能な昨今、日本を知らない人がいたからだ。「なんで日本を知らないの？ オリンピックで金メダルをとったりしてるのに……。アップルさんの田舎って、どこなのよ？」

華雅里の口から自然と漏れる言葉。華雅里はその事に気づいてはいない。

華雅里はもう一つ気付いていない事があった。

それは、アップルと名乗る人に過剰なまでの興味を持ってしまった事だった。

小学生からオーシャンに登録している華雅里にとって、どの誰か分からない相手の対応は慣れているはずだった。なのになぜアップルという人がとても気になってしまふのだろうか？

時刻は十七時半になろうとしている。

華雅里は、時間の流れを忘れてまた返事をした。

私が暮らす日本は、世界の誰もが知る有名な国だと思っていました。

日本は海に囲まれた国です。

ビルもあるけど、山も河もあります。

都市と自然が両方あるとてもいい国ですよ。

今度は、アップルさんの田舎の事を教えてくれませんか？

華雅里は、アップルからの返事を待った。

まだ一分しか経っていないのに、待っている時間がとても長く感じてしまう。

華雅里は、苛ついて携帯電話の蓋を閉じた。

正体不明の相手、アップル。

メール送信あとの返事がすぐにこないのは当たり前で、一回の交流で終わってしまうのもよくある事なのに、それが分かっているはずなのに、華雅里は苛々をどうする事もできなくて立ち上がった。カバンを持って渋谷駅に向う。華雅里は、自分を苛々させてしまいうアップルに見切りをつけて、家に帰ろうと思ったからだった。

「なんか面白くない」

携帯電話をスカートのポケットに入れて歩く。

マークシティの長い通路を東へ歩けば渋谷駅がある。そこから電車に乗り、千歳船橋駅へ向った。その千歳船橋駅の近くに華雅里が住む自宅があった。

第4話

華雅里は、三人兄弟の末っ子だった。一番上が兄、二番目が弟で、華雅里は男兄弟の仲で勝気に育った。

一番上の兄は、会社員として働いている。長男特有のおっとりとした性格で華雅里にとっては優しい存在だった。次男は高校三年生。華雅里と年が違いせいもあって今でも華雅里の喧嘩相手だ。

華雅里が自宅に到着したのは十九時近くだった。

まだアップルからの返事は無い。

華雅里は、二階にある自分の部屋に行き、自分の机にカバンと携帯電話を置いてから、一階のリビングで兄たちと夕食を摂った。

テレビのお笑い番組を観ながら夕食を摂っている華雅里は、兄たちのピン芸人へのツッコミが面白くて、アップルの事は忘れていた。兄たちとくだらない話に花を咲かせ、食後は二番目の兄とテレビゲームで遊び、それから入浴し汗を流してから部屋に戻った。

いつもと変らない平凡な日課。そのはずだった。

華雅里が机に向かい宿題をしている時に、携帯電話はメールを受信した。携帯からメロディが鳴り響く。

華雅里の脳内は、宿題からアップルの事に切り替わった。

「来た！」

机の隅に置いてあった携帯電話に手を伸ばす。蓋を開けて中の画面を見ると、華雅里の予想どおりアップルからの返事だった。

私が住んでいる田舎は、必要最低限のもの以外、便利なものは何もありません。

自然に囲まれた生活をしています。

私の周りに在るものと言ったら、読書のための本くらいです。

街で住むように言われた事もありましたが、喧騒が苦手な私は敢えて田舎暮らしを選びました。

景色が綺麗なよい所ですよ。

「流暢な英語を使う人だなー。年上のイギリス人かな」

華雅里は、近くにあった辞書で、読めない単語を調べた。調べながらアップルのメールを読んでいるうちに気付いた。

「しまった。アップルさんが住んでいる国名を聞いてないよ」

華雅里は、辞書を手放すと、急いでメールした。

環境がよさそうな所ですね。

アップルさんが住んでいる国はどこですか？

今度のアップルからの返事は、すぐに返ってきた。

私が住んでいる国はドワイです。

そもそも田舎の国なので、ドワイを知っている人も少ないです。

私が何故ドワイを知っていたかというと、祖母の生まれた国だからです。

私が子供の頃から、祖母が自然が多くて景色の綺麗な所だと言っていたので、幼かった私は懂れて、今もドワイが大好きで暮らしているのです。

今度はミサキさんが暮らしている環境を教えてくださいませんか？

第5話

華雅里はアップルからのメールを読んで不思議に思った。

ドウイなんて国、聞いた事がないよ。前に国名と首都名の書き取りテストをしたけど、無かったし。

疑問に思ったものの、アップルとのメールのやり取りが楽しくて、浮上した疑問の事などすぐに忘れてしまい、華雅里はまたすぐにメールをした。

私が住んでいる所はビルが多いです。

アップルさんが好きじゃない喧騒もあります。

便利な物もいっぱいあります。

必要のない物もいっぱいあります。

街にはいろんな物が溢れています。

でも、アップルさんが好きな自然はありません。

木が一定の間隔で植えてあるくらい。

アップルさんの事を聞いてもいいですか？

男の人ですか？

女の人ですか？

何歳ですか？

働いていますか？

ドウイと日本との時差はどのくらいあるのだろうか。

もしかしてアップルの就寝時間帯ではないかと、華雅里はメールをしてから思い、睡眠の邪魔をしていないかと心配したが、次のアップルの返事もすぐに返ってきた。

私は一応男です。歳は二十歳くらい。

仕事はしております。

でも、どんな仕事かは秘密です。

アップルからの返事はきたものの、その内容に華雅里に対しての質問はなかった。

華雅里はメール文を読み終えてから携帯電話の蓋を閉じて机の端に置いた。

アップルの真面目な文章は、華雅里の脳裏に優しい印象で残っている。

アップルは、男性で社会人で二十歳くらい。白人なのか。それとも黒人なのか。もしかするとアジア人かもしれない。

今までいろいろな国の人々とメールをしてきたが、年が近い人ほど相手の個人情報についての質問が多くなる。そうなってくると鬱陶しさを感じてしまうが、質問が無いと逆に淋しさを感じてしまう。しかし、アップルは違っていた。華雅里が暮らす環境についての質問はするが、華雅里自身についての質問はしてこない。それは今までに無かった感触。

アップルは田舎暮らしといていたから、個人の事よりも諸外国の事が知りたいのだろうか。

疑問に思えば思うほど華雅里はアップルの事がとても気になり、会う事もないだろうアップルについての妄想が膨らむばかりであった。

第6話

次の日。華雅里は登校中の電車の中でアップルへメールをした。

アップルさんは、背が高いほうですか？ 低いほうですか？

白人ですか？ 黒人ですか？ それとも黄色人ですか？

朝は何を食べますか？

趣味はなんですか？

授業を受けている間に返事が返ってくるかもしれないと思ったからだった。

だが、返事は華雅里の予想より早かった。すぐに返ってきたのだ。

身長は、真ん中くらい。

混血なので、偏った肌の色はありません。

朝は、いろいろな野菜を食べます。

趣味は、散歩です。

ミサキさんも趣味はありますか？

朝は何を食べるのですか？

肌の色は何色ですか？

身長はどのくらいですか？

ミサキとは、交流サイト・オーシャンで使っている華雅里のサブネームである。

アップルの返事は、当たり障りの無いものだった。そして華雅里の質問をマネて返事をしてきたのだ。

華雅里は違和感を感じたが、アップルの返事が嬉しかったので、電車に揺られながらすぐにメールした。

趣味は、このメールだけど、ほかはカラオケかな。

朝は、パンだったり、お米だったり、食べなかったり。

アジア人なので、肌は黄色です。

身長は、160センチくらい。

私はこれから学校なので、すぐに返事はできないけど、終わったら返事をするので、遠慮なくメールしてね。

華雅里は、携帯電話を閉じた。次の駅で電車を降りるからだ。しかし、メール受信の音がしたので、また携帯電話を開いたのである。

学校に通っているのですか。

どんな事を学んでいますか？

1 + 1 =

これは分かりますか？

華雅里は、目を見開いた。一桁の足し算の答えを求めてきたメールは初めてだったからだ。

「こんなの簡単じゃない」

華雅里は、電車から降りて、ホームを歩きながら携帯電話のボタンを押した。前を見て歩いていないので、肩を並べて歩く人々とぶつかったりしたが、華雅里は全く気にしなかった。

1 + 1 = 2

これなら簡単。誰だって分かるよ

アップルさんの最終学歴は？

どこの学校を卒業したんですか？

華雅里のメールに、またしてもアップルからの返事はすぐに来た。

通信で学んだので、特にどこというのはありません。

最終学歴ですか。

一応、最後まで学んだので、ミサキさんのことだと、どの辺りになるのかな？

次の質問です。

ミサキさんが、自身の固体を増やす時は、どうするのですか？
分裂ですか？

「え！？」

この声は、アップルからのメールを読んだ華雅里のものである。

それは華雅里が渋谷駅を出て高校への通学路を歩いていた時だった。

「自身の固体を増やす時ですって？ 分裂って、どういう事よ？」

アップルは、思考が変なのだろうか。それとも、メール相手が女性と分かれると、卑猥な言葉を誘導したがるエロ系の人なのだろうか？

華雅里は、メールの返事をやめようと思った。相手が変態なら、下手に返事をするとか度もメールを送信してくるようになるからだ。授業を受けながら返事をどうするか考えたが、授業が進むにつれ、メールの事はどうでもよくなり、帰る頃にはアップルの事はすっかり忘れてしまっていた。

第7話

授業が終り、帰り道を歩いていた時である。

普通なら受信するまで気にも留めないメール相手の事を、華雅里は思い出してしまったのだ。携帯電話をカバンから出してメールの受信履歴を確認する。アップルからのメールは、その後も受信していない。

普段なら、変な質問には返事をしない華雅里だったが、どういう訳か華雅里はアップルへの返事を入力し始めた。

私の国だと最終学歴は大学院になるのかな。

自身の固体を増やすって、どういう意味ですか？

私、自分を増やせないんですけど？

出産っていうのならあるけど。

アップルさんの好きな食べ物はなんですか？

好きな映画は？

好きな有名人は？

スポーツはする？

するとしたら、どんなスポーツですか？

華雅里は、携帯を持って返事を待った。アップルからの返事は必ず来る。華雅里には自信があった。

華雅里の予想どおり、返事は約十秒後に来た。返事の速さは、華雅里の予想外だった。

「はや！」

華雅里は、言いながら返事を読んだ。

大学院というのがあるのですね。

どんな所でしょうか？

分裂では自身の固体を増やさないのかな。

出産というのは、どういう事なのでしょう？

ミサキさんの国で使う言葉と、私が使っている言葉が違うのでしょうか。

把握するのが難しいですね。

私の好きな食べ物、ナトラステリというものです。

海中に生えている苔で、そのままでも食べれますし、漬物にしてもおいしいです。

好きな映画は、ホノハニヘレメです。

勇者の冒険物語で最後の大どんでん返しには意表を突かれました。好きな有名人は、ポーガ・デンドロコです。

実に個性的でインテリジェンスの高いものを感じて好きです。スポーツはします。

氷の上を滑るのが好きで、特に滑る時の道具は決まっておりますん。

今度は、私の質問です。

同じ種族間で起きた大きな喧嘩を教えてください。

メールを読んだ華雅里の足は止まっていた。

華雅里は、渋谷駅の入り口で棒立ちしていたのである。

「何この返事。訳が分かんない。全然知らない名前だし。同じ種族間で起きた大きな喧嘩って戦争の事？ この前、テレビで放送していたミツバチ対スズメバチじゃないよね……。普段、英語を話さない国の人なのかな。言葉が違い過ぎて、読むのが難しい」

華雅里は、渋谷駅構内の隅へ移動して、カバンを床に置いてその上に座り込んだ。

「なんだか分からないけど、悪い人じゃないみたい、こうなったら、とことんメールしてみよう」

同じ種族間で起きた大きな喧嘩って、

第一次世界大戦や第二次世界大戦の事？

アップルさんって、大戦の事、習わなかった？

世界的に有名のはずだけど？

このメールをアップルへ送信した時、ある不思議な事が起こった。華雅里の携帯電話のコールが鳴ったのである。画面に表示されたのは、電話番号を登録していない表示されないアップルの名前だった。

第8話

「ウソ。なんで鳴るの？ アップルさんの電話番号、知らないのに。携帯に番号登録してないのに、アップルさんの表示が出るの？」

華雅里は、一瞬恐怖した。実は、アップルは死んでいて、知らずにあの世とメールして、ついにあの世から電話を受けてしまったという、心霊現象だと思ったのである。

「怖い。きもい……」

しかし、それでもアップルの事を知りたい。ずっとコールしたままでは、いずれ携帯の電池はなくなってしまう。

華雅里は、恐る恐る通話ボタンを押した。

「はい」

とりあえず、返事だけしてみた。

「初めまして。アップルです。実のところ、久し振りっていうのが、私の思いですが」

相手はアップルだった。低音の男性の声だ。驚くことに、電話のアップルの言語は日本語だった。

「初めまして。ミサキです」

挨拶を交わしたあと、華雅里は、思わぬ行動に出た。きもいに対するの恐怖が、怖いもの見たさ知りたさに変ったのである。

「なんで、どうして、電話番号を知ってるの？」

怒涛の如く華雅里の口から迸る質問に、アップルは嬉しそうに答えた。

「正確に答えるなら、君が私に電話番号を教える事になるんだ。華雅里という名前もね」

電話向こうのアップルの声は笑っていた。

「やだー。なんで名前まで知ってるの？」

既に答えを聞いているのに、その答えに対しての質問をしてしまう。これは華雅里だけでなく、年齢を問わず女性特有の反応である。

アップルは、ゆっくりめの口調で華雅里に話した。

「いつの日か、未来の君が、私に電話番号を教える事になるんだ。未来と過去の時波の影響を受けてね。今の私と君のように、繋がる事になる。そして君は、君の命に関わる重要な人物を助ける事になる。携帯電話を使ってね」

「私の命に関わる重要な人物って、誰よ？ 私は、殺されそうになるの？」

言ってから、華雅里は今自分が渋谷駅構内にいる事に気付いて、周囲を見回した。幸い誰も華雅里の『殺され』言葉は聞いていなかったようで、行き交う人々は、華雅里を見る事もなく通り過ぎて行く。

アップルは、華雅里の反応を楽しんでいるようで、笑い口調で今後についての説明を始めた。

「いや。殺されるような事態にはならない。むしろ、君がいろいろと助けていくんだ。最初に助ける事になるのが、この私だ。今メール交換をしているアップルは、過去の私。まだ日本の事を知らない過去の私なんだよ。知らない言葉も多い。呆れずに話し相手になってくれるとありがたい。それと、これから話す事を信じて欲しい。時波が不安定なので、未来の全てを君に伝えられるかは分からないが……」

その後のアップルの話は、驚く内容だった。

華雅里は、なぜアップルとメールをする事になったのか、アップルの話を聞いてやっと理解した。

「ある意味、私は勇者なのね。でも、旅も無く、戦いも無く、恋も無い。っていうか、これって失恋じゃない。アップルさんの正体だけは、知りたくなかったよ。なんでアップルさんを好きになってしまったのかなー。煌く初恋だと思ったのに。もう自己嫌悪だよ」

通話が終わった華雅里は、携帯電話を持った手を下ろすと、首をうな垂れた。

初めての恋と失恋。だが、別れを告げられた訳でもない、アップ

ルに恋愛相手がいた訳でもないのに、いきなりの失恋。

失恋をしても、アップルを恨む気にはなれない。アップルを嫌いにもなれない。ただただ自己嫌悪に陥るだけ。笑える程度の軽めの自己嫌悪に。

それは、下校途中の十七時頃の事であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8662h/>

煌めきの想い

2010年10月8日15時49分発行